

## お陰様とお互い様の道徳

——人間中心主義と理性主義を土着思想から見なおす——

實川幹朗

はじめに

まず、言葉遣いについて一言お断りすることから始めたいと思う。本シンポジウムの主題は「倫理の教育」なのだが、私はこの「倫理」という言葉を採用したくない。と言うのは、これと似た意味の「道徳」のほうが、意味がより広く、しかも事柄の本質に相応しいと考えるからである。「倫」とは字義からも、儒教での用法からしても、人の仲間内のことで、人間どうしの望ましい関係に限定されてしまう恐れが強い。これに対し「道徳」は、老子の『道德経』にも見られるとおり、自然全体を導く仕組みと理解しうる広がりを持っている。

つまり「倫理」から論じると、すでに人間中心主義という、一つの道徳的立場に拠っているわけである。これは言葉遣いの問題

だけでなく、明治以降の日本の教育の基本が、ユダヤ・キリスト教を基軸とする西洋近代思想に論拠を求めてきた歴史に関連する。つまり、人格神を中心に置くこの思想では、理性を持つとされる人間が「万物の霊長」と捉えられ、自然の支配者なので、人倫がすなわち道徳に重なるわけである。

私はこの立場を採らない。ユダヤ・キリスト教のなかにも傾聴すべき道徳説が認められるのは確かだが、こと教育に関するかぎり、教説の立派さや整合性だけでは採用に値しない。それどころかこれらの特性が、かえって教育の妨げになる場合が多いのである。そこで、せっかくの題目だが、以後は「倫理」でなく「道徳」の視点から論じてゆきたい。

道徳の二層構造と教育

さて、道徳の教育の課題は、内容と形式それぞれに、重要な論点がある。この二分法を採るには、教育という実践領域ならではの特徴が絡んでいる。教育で伝わるのは、言葉で明示された内容のみではない。教え方による非言語的な情報とそれによる効果も含まれ、等しく重要だからである。とくに「言行不一致」による二層構造が問題となる。厳密に言えば、二層構造は言語的な教示と非言語的なそれとの間でのみ起こるものではなく、言語的と非言語的それぞれの内部においても成立している。しかし、傾向としてはこの両者が二層構造のそれぞれを担うと言えるので、短い本論の中では、便宜的に両者を重ねて考える。例えば、立派そうな建て前である、「自主的な思考と積極的な行動」を言葉で教え、しかし教師が実際に行えなければ、立派なことは実行せず、言うだけでよいのだとの教育がなされている。さらに、もし周囲や権威者に同調しない者を非難したとすれば、実際の人物評価は公言された建て前とは別の基準で行われるのだと教えることにもなる。そこで生徒が、実際に適用されている人物評価の基準は何なのかと考えてみると、じつは集団や組織により必ずしも一定でないし、局面によっても異なるばかりでなく、基準を正確に言い表すことさえ困難を極めると気づいてゆくかもしれない。あるいは差し当たり、財産や学歴といったものの持つ有効性に気づくかもしれない。

「言行不一致」による二層構造はしばしば生徒を当惑させるが、

問題を提供し、身についた思考に導きつけかけともなりうる。したがって、二層構造自体は排除されるべきものではない。これを表立って言い立てれば、近ごろでは好まれない場合が多くなってしまうが、じつは外すことのできない社会的要請であり、したがって何らかの仕方で教えなければならぬ仕組みだからである（先生の言うことを素直に信ずるだけの生徒は将来、大変な不利益を被るか、あるいはもたらすであろう）。このような二層構造はむしろ、文化の柔軟性の証であり、社会的な生命力の源でさえある。

表側で教えられる建て前と本音の生活の動きとが、適度の緊張をはらみながら二層構造を作り出す。道徳の生命は、これらの裏表が過度に敵対ないし乖離せず、しかし適度にずれつつ、補いあって相即するところから産まれると考えられる。例えば「かたいこと言うなよ、いいじゃないか」というふうには本音が露出するとき、建て前は「かたい」何かとしてわきまえられつつ、ひとまず脇に置かれるのである。建て前の無視が際限なく進めば、おそらく道徳は崩れる。しかし、そうならないよう「ほどほどに」建て前から外れることを、許容するかむしろ折り込み済みなのが、巧みな二層構造の特徴であり、「逸脱」が建て前も二層構造そのものを傷つけないのが、文化の柔軟性である。

現代のわが国の問題は、この二層構造の適切な維持が難しくなっている点にある。明治以降の教育では、天皇崇拜の国家神道

に加えて、啓蒙思想期を中心に西洋の理念を建て前とするようになった。それまで教育理念の基軸だった儒教と仏教からは、非常に大きな転換だった。のみならず、これらの東洋思想なら、まだ教えられる建て前と文化の本音との差は、敵対するほどには大きくなかった。そのうえ儒教も仏教も、適度に日本化され修正されていた。しかし明治以降の教育では、国家神道さえ、キリスト教を手本に伝統的な神祀りを変形させている。古代からのわが国の伝統だと近ごろは誤解されかねないが、じつは非常に西洋的なのである。このため、裏表に相即しがたい落差を生じてしまった。

戦後になると国家神道は後退し、代わりにアメリカ合衆国からの影響が強まって、プロテスタント的な価値観の輸入が拡大された。このため、教育の建て前と文化の本音との差はさらに広がり、加えて、基底の土着文化を担った地域社会が機能を失ってきた。これには、産業構造の変化に加え、祭りや若者宿などを通じて行われてきた地域の教育機能が対抗し、それらの機能を奪おうとする戦前からの教育政策が継続された成果を無視することではできない。近ごろでこそ、地域の教育機能の喪失を嘆く声が頭わに聞かれるが、もともとこれは、中央集権的な公教育が目標とした事態である。いまもなおこの目標は、基本的に修正されていない。

「言行不一致」の二層構造がわが国でよく見られることは、誰にも経験から明らかだろう。しかし、これが日本だけの特殊現象で

ないこともまた確かである。ただ、わが国の場合には、このような構えが組織的に形成されてきた点は重要である。有史以来の為政者は、つねに外来思想を掲げ、建て前として指導してきた。けれども、他方でこれはけっして徹底されなかった。江戸幕府は、政権を脅かす恐れのある思想は取り締まったが、庶民の文化に対しては概して寛容であり、ときどき「御触れ書き」で形式的な指導をするに留まっていた。このため基底には、土着的な感性が温存されてきたわけである。

二層構造自体はけっして無くないが、わが国ではいまや二層間の関係が歪み、あるところでは乖離し、別のところでは過剰に敵対する状況が生じている。この要因を考えると、一つには中央集権的な初等中等教育と、この延長にある高等教育の高度成長期以降における急速な普及がある。国民の多くが、長期間にわたる上からの外来思想教育の影響を逃れられなくなっている。もう一つには、それらの理念をなす西洋近代的な価値観の建て前と日本の土着文化とのずれの大きさがある。後者のずれは、ユダヤキリスト教文化のもとと備えている理想の高さから来る、本音との落差にも由来している。

### 西洋での一元化圧力と善悪の二極化

理性に基づいた主体性、能動性、積極性、自由、自律、あるいはこれを裏返した従順、義務、奉仕、献身、それらに理論的な基

礎を提供する真理、善または正義、さらに普遍・永遠といった理念が、近代教育では徳目と捉えられている。これらはすべてユダヤ・キリスト教に起源を持つ概念である。善は儒教と仏教でも言われるが、悪と戦い滅ぼす「一神教」的な正義とは食い違いが大きい。滝沢馬琴が、江戸も末期になってから、それまでの有心、靈異、武勇、幽玄、義理人情、ワビサビ、渋み、粋などの境地に対抗して勸善懲惡を押し立てたとき、それは新鮮な主張であった。しかももちろん、作品の本身は、絶対的な善惡の戦いとはほど遠かった。近ごろの学校で教えられる価値観で、近代以前からの連続性を持つのは、和、思いやり、礼儀、長幼の序、それに博愛と平等思想の一部くらいではなからうか。

ここに挙げた主体性をはじめとする「理性的な」徳目が、西洋思想史のなかではたしかに、啓蒙思想期から市民革命期を経て、ユダヤ・キリスト教の神の一元的・絶対的な支配からの脱出の過程で獲得されたとは言える。けれどもこれらの理念そのものは、この過程で新しく開発されたわけではなく、もともとこの宗教の神の属性（裏返せばこの神への忠誠）と理解されていたものであった。したがって近代の変化とは、結局は、人間をかつての神になぞらえたことになる。それに、この人間中心主義そのものがすでに、地上のものごとに関するかぎりは、かつて神から認められていた地位なのだった。

キリスト教の教会や聖職者に忠誠を誓うか否かという点で、こ

の宗教の立場からすれば大きな変化なのだが、それだけである。逆さまに、「唯一の人格神」という発想さえ、人間中心主義から導かれた一支流と解釈できる。すなわち、啓蒙期以降の西洋の「世俗化」は、支配の中心を移しただけで、発想には根本的に新しいものを含まないのである。

こうした流れが、一方では近代科学技術の発展を支え、他方では西欧近代市民社会の「倫理」となった。わが国の学校で教えられる理念はこれを受け、近ごろはアメリカ流プロテスタントの禁欲・勤勉の洗練を加えている。このため、ふつうの人間にはますます実行の難しいものとなってきている。この理念は周知のとおり、もともと神に救われるべく選ばれた者が、俗世でも成功して神の栄光を表すという、選別の論理に基づいている。したがって、王侯貴族に代わる市民エリートのための道徳であって、誰にでも実行できないのがむしろ当然なのである。<sup>(1)</sup>

日本以上に身分制度の強固だったヨーロッパでは、古代にキリスト教が国教となっても、全国民への徹底は図られなかった。聖書はもちろん説教までラテン語だったくらいで、理解できない庶民は別の文化を生きていた。つまり、社会階層に重ねた二層構造が作られていて、庶民文化の中には、キリスト教以前からの土着の思考が生きていたのである。二層は分離しながらも同じ社会を構成するので、互いに相手の文化を「覗き見」する形で交流が行われた。このため、キリスト教を信する上流社会の中にも土着

の道徳が取り入れられ、裏表の相即がある程度可能であった。下層の本音は、軽んじられつつも存在を認められていたわけである。この状態が、中世からルネサンスの初期までは保たれていた。

だが、一五世紀後半から盛んになった、魔女狩りと啓蒙主義に代表される綱紀粛正運動は、これを一元的な構造に近づけようと努めた。ユダヤ・キリスト教の神の属性に重なる理性的な、高い理想を正義として掲げ、これに反するものを低俗な、悪として追いつめ、滅ぼそうとする動きである。またこの理想を真理とし、標準と見做し、当てはまらないものを異常、迷信、さらに無意味として閉じ込めたことは、ミシェル・フーコーらのつとに指摘するところである。近ごろの言葉では、「原理主義」ということになろう。

美しい真理の正義が、醜く誤った悪を産み出した。この悪はつねに理性の反対側、すなわち肉体を含む物質の側から生じてくるのであった。例えばボルノグラフィは、すでに一六世紀の『痴愚神礼讃』にその兆しが見られるが、フランス革命期に政治家への批判、風刺の手段として本格的に登場した。つまり、しばしば誤解されるように肉感的趣味を満たすためではなく、これまでなら理想からは外れたにせよ、「外れもの」として存在を許された領域を悪として再定位し、攻撃の標的に変えたのである。悪の領域は明らかに醜く、邪な、嫌らしいものであるべきなので、そのように形作られる。ひとことで言えば、「猥褻」である。だから

政敵への攻撃に使えるのである。この種の攻撃が、近ごろではわが国でも珍しくないのは、言うをまつまい。

一九から二〇世紀にかけての教育の庶民への普及が、こうした一元化への圧力に拍車をかけた。現代のアメリカ文化はこの延長上にある。禁酒法（一九二〇―三三年）が、これを極端に推し進めた実験例である。その結果が惨憺たるものだったのは説明に及ぶまいが、この失敗も、発想の基本を改めさせるほどの効果は持ちえなかった。アメリカの通念では、いまでも飲酒は悪であり、人間の弱さに免じて、辛うじて許容される慰めでしかない。そうした道徳観はしかし、社会全体として飲酒を減らすことさえできず、かえって罪悪感に駆られての「やけ酒依存症」を増やしている。かつてプロテスタントの哲学者カントでさえ、理想は現象界に、つまりいわゆる現実世界に探してはならないと説いたのだが、聞き入れられていないようである。

悪を破壊するという建て前で一元化の圧力を強めても、二層構造自体は破壊されない。上品で優雅なものは、下品で粗野なものとの対比においてのみ輝くからである。つまり、一元化への努力そのものが悪を作り出すのであって、初めから矛盾を内包する仕組みとなっている。近ごろのアメリカ（とヨーロッパ）にも建て前と本音の二層構造は存在するが、わが国のように「本音」が良しとされることは稀で、「本当はいけないのだが」との悪への妥協か、「どうせ自分は悪だ」と居直る「悪人アイデンティティー」

として、否定されつつ存在を続ける。そしてこれを背景に、ほとんどの人には実現不可能な理想が、高く掲げられているのである。

### 日本の教育における二層構造の歪み

高く美しい理想と低く醜い俗悪との対比は、人間性の不可避の一部を切り離し、征服、支配されるべき敵と位置づけることから生ずる。このために、道徳全体に過度の緊張と憎悪が満ち、差別が産み出され、しかも正当化される。賀茂真淵や本居宣長などの国学者たち、また自然を尊ぶ安藤昌益などの思想家は、儒教批判の脈絡の中で、もう一八世紀にこのことを明確に指摘していた。

しかし、黒船に象徴される軍事的な圧力下で、「近代化」を急ぐしかなかった明治維新以後のわが国では、文明開化、脱亜入欧政策がもたらす一九世紀後半のヨーロッパ思想・制度の輸入が、儒教以上にその轍を踏むことには気づきにくかった。国学者たちでさえユダヤ・キリスト教の影響を受け、天御中主神を創造主に重ねたうえ、その直系としての天皇支配を説く平田篤胤の系統が力を得た。篤胤自身の全体像は、必ずしもこれに尽きるものではないが、その面が強調されたのは不仕合わせなことであった。

「神聖にして侵すべからず」「万世一系」と規定された明治憲法下の天皇の姿は、「一神教」の神の引き写しである。大正から昭和初期にかけての「革新右翼」たちの思想も、ほとんどがこの路線の延長線上にある。大川周明が使いはじめ、その後一世を風靡

した「日本精神」という言葉そのものが、ユダヤ・キリスト教の影響を如実に表している（大川には伝記的にもキリスト教の影響を受けた事実がある）。「日本精神」は、軍国主義と戦争遂行の中で「物量に打ち勝つ」力として喧伝されたが、物質と精神を分離しかつ後者の優位と支配を主張する構えこそ、この宗教の根本教義と言えるものである。ユダヤ・キリスト教的な理性主義・人間中心主義が、右翼思想の中に取り入れられているのである。

こうした動きは、欧米列強の植民地政策に対抗するため、急場凌ぎに相手の武器を奪う戦略だったと言えるだろう。江戸時代までのわが国の文明は、欧米諸国に比べ、全体としてはけっして劣った水準になかった。ただ、大量殺人機械の開発と中央集権的な動員に関するかぎりは、明らかに水を空けられていたのだった。しかし日清、日露戦争に「勝利」するなど、思いの外うまく運んだため、急場凌ぎが長期化され、強化されるに至った。欧米への防衛のほすが、いつのまにか、植民地をめぐって戦うほどにまで「仲間入りを果たし」ていた。

言い換えれば、極めて柔軟かつ迅速だった明治初年の対応が、その後は急速に硬化症を発し、状況にそぐわない固定化を招いてしまった。借り物の原理をもって「本家」と戦ったのだから、敗戦も当然だったと言えよう。その結果をどう受けとめるかが、戦後の課題だったはずである。しかし結局は、明治から昭和の前半までと同じことが繰り返されてきたのではないか。

明治政府の欧化政策は、建て前からすれば、それまでの価値観をまったく作り替えるものであった。けれども、そのような急激な方向転換が可能だったのは何故だろうか。すでに各方面から議論されてきた問題だが、心理的ないし宗教的な側面から言えば、是非善悪、理論的な整合性などを問わずに、力の強いものに出会えば取りあえず尊重し、祀るといふ構えによるのであった。このため、日本の近代化は底が浅く、内発的な動機がなく、外見だけの借り物だとの批判もある。

たしかに、底の浅い借り物だとする理解には、見るべきものがある。しかし、それが必ずしも批判の根拠になるとは思われない。なぜなら、新しいやり方を導入するにあたって、うわべだけ借りるのではなく、原理から根本的に入れ替えるほうが常に正しいとは言えないからである。よりふさわしい底の仕組みを温存しつつ、うわべだけを借りることで、二層構造が有効に働き始めるのなら、それが正しいやり方にちがいない。和魂洋才、中体西用などの標語が、これに通ずる。取りあえず祀り、馴染んで共存し、やがて馴らし、さらには護り神に変える発想は、天神信仰を代表とするわが国の土着信仰での怨霊との付き合い方である。明治初年において、維新政府が迅速かつ柔軟に「借り物の」西欧化を実現できたのは、この伝統に則ったからに他ならない。

問題はしたがって、うわべだけの近代化にあるのではなく、うわべだけのはずだった借り物が、制度となるに及んで固着し、本

音の道徳を脅かし始めたところにある。地域の風俗や祭りが、迷信や非行の温床とされ、方言は野卑な言葉、民謡や童歌は汚らしい音楽とされた。村の神々は大きな神社に合祀され、記紀神話の「由緒ある」神々に従属させられた。西洋の学問を身に付け、標準語を読み書きし、話し、ヨーロッパ民謡の輸入に他ならない文部省唱歌を歌うことが、「方言札」などの罰を伴って強制された。この競争を勝ち抜いた者が官吏として出世したのであり、さらなる出世のためには、欧米への留学も必要であった。

これらの政策の目標は、国民が天皇のもとで、西欧の近代国民国家と同じように、一元的に団結することであった（王権神授説こそ否定されたが、キリスト教は現代にいたるまで、アメリカをはじめとする「先進諸国」の事実上の国教である）。その結果は、同じことをしてきた西欧諸国から、東京裁判で「戦争犯罪」を咎められ、「一億総懺悔」（「総告解」のほうが正しい？）を余儀なくされたのであった。

この歩みへの反省は、明治期と同じく、またしても素速く巧みであった。戦地での「玉砕」、内地での原子爆弾、無差別爆撃が、黒船に代わった。ドイツ、イタリアなどの降伏、中南米でのアメリカの覇権が、かつての阿片戦争のわが国への影響と同じ効果をもたらした。ペトナムやイラクのように抵抗することはなく、多くの国民は強い占領軍を、少なくとも表面上は喜び迎えたのであった。形だけの「民主」主義と、アメリカ風の勤勉と英雄の

「倫理」が建て前として導入された。

しかし、またしても明治期と同じ硬直化が始まった。「保守的」な人びとは、天皇制が維持されたことで、「日本の伝統」が守られたと錯覚した。これに対抗するため、「進歩的」な人びとはマルクス主義をはじめとする左翼思想に頼った。「敵の敵は味方」だと思ったのだろうが、これも結局はユダヤキリスト教の伝統から出た宗教・思想運動なのであった。「史的唯物論」が、絶対主義国家プロイセンの御用哲学者だったヘーゲルの「理性の狡知」を逆立ちさせたに過ぎないことは、マルクス本人が認めているくらいである。この国の憲法が明治憲法の手本だったことは、中学生でも知っている。『資本論』の最初の邦訳者だった高島素之は、やはりキリスト教の影響を強く受けた人物で、後に右翼の国家社会主義者となった。「転向組」なのだ。本質が同じだからこそ、簡単に乗り換えられるわけである。理性の自己実現を物質の発展法則と言い換えた思想は、正義の戦いの代わりに階級闘争を煽るものであった。

教育現場ではこの両者が激しく争ってきたが、大局的に見ればいずれも主体性、能動性、積極性、自由、真理、正義といった近代西欧的な徳目を重視し、あとはそれが左右どちらの政治的表現をとるかの問題であった。同一線上の綱引きなのである。もしこれが二層構造の上側としての役割をきちんと果たし、下層の本音の文化と相即できたならば、それはそれでよかったのであろう。

しかしながら、高度成長期以降の中等教育の急激な普及と大学進学率の大幅な伸びは、かつての強制的な軍国主義教育をも上回る、一元化圧力となった。戦前の小学校卒、戦後の新制中学卒以下の学歴の人びとのなかには、かつては経済的な事情から進学を断念した、あるいは敗れて進学しない秀でた人材が多く含まれていた。基底の本音の文化を担う中軸となりえた人びとが、いまや西欧近代の価値観を身に付ける競争に参加せざるを得なくなったわけである。加えて受験競争の激化とサラリーマンの増加が、地域の文化の維持を困難にしたことは言うまでもない。学習時間の増大が、学校の内外での子供の異年齢集団の形成を妨げたので、子供どうしの文化伝承もできなくなった。

教育現場では左右のいずれからも、教師たち自らにとって実行不可能な借り物の理念が、言葉の上だけで教えられる他はなかった。皮肉に言えば、その態度こそが「精神主義」の表れであった（西欧の精神主義は、精神の言葉だけで完結せず、肉体を支配するものだが、借り物ではそうはいかない）。基底の層に呼応できないいわべだけの理念は力が無く、二層構造の上部の役割すら果たせない。建て前はあまりに白々しく、本音は見えなくなっている。子供たちは結果として、教えられる道徳の言葉を、無意味な奇麗事として聞き流し、利いたふうな言葉をその場しのぎに並べる訓練を受けているのである。二層構造が機能しなくなり、かと言って一元的統一でもなく、身の置き所の無い混乱が迫っている。

## 土着思想の復権

さて、これまでは道徳の教育において何をすべきかの本題に入らず、周辺を回っていた。それが長くなってしまったが、何故かといえば、本題に即して言うべきことは単純であり、ごくわずかだからである。むしろ誰でもが知っているのに、語る必要すらないが、そうであるだけに、いきなり語ったのではかえって理解が得られにくいだろうと思われた。

こんにちの道徳の問題は、内容的には人間中心主義と理性主義への反省に集約される。うわべだけの奇麗事をやめ、人間性の一部を切り取って理想化したり敵視したりするのでなく、自ずからありのままを受けとめることである。自然への回帰と言ってもよいが、平凡に響くかもしれない。これはもう西欧においてさえ、長きにわたって論じられてきたことである。最近でも、「自然化 naturalize」といった表現で、自然や物質と人間との接近の主張される場合が多い。

しかし、問題はこのときの自然の捉え方である。自然科学に代表される自然は「心無い」もので、自らは考えることなく、ただ法則に従って運動する。これが科学的ないし客観的合理性だが、この法則は、人間の理性によって作られたか、少なくとも理性によつてのみ把握されると考えられている。つまり、人間を唯一の主体、能動性と積極性、自由の源に置く、ユダヤキリスト教

源の西洋近代的な思想から生じてきた立場なのである。近ごろ「環境倫理」が大きな問題となっているが、資源として利用する立場からの考察では、「保護」とは言いつつ、人間中心の搾取と破壊の論理の延長でしかない。

さらに、道徳の教育では、内容と形式それぞれに、重要な論点があると述べた。するとまず内容的には、西洋近代的価値観に代えて、自然と人間が「お互い様」で関わっており、「お陰様で」生かされていること、これが「有り難い」ことなのだとの発想を見直すのがよいと言える。そして人間はまず、なによりも自然の一部なのである。これは、おそらく古代以前からわが国の民俗の中に在った考え方で、幸い現代でもまだ根強く残っている。しかし、わが国の有史以来、知的選良の持ち分となった外来思想を軸に文字化された著作のなかには、明確な形で説かれることが少なかったし、近ごろでもまたそうである。

したがって、道徳教育の基本的な内容については、過去の優れた思想家の文献的研究の意義は否定できないものの、むしろふつうの人びとが日ごろ考え、説き、実践してきた民俗的な知恵に学ぶことを主に考えるのがよからう。これが土着思想である。文字化され、複雑な論理を操る思想のみが尊いとする根拠は見いだし得ない。これはまた、わが国を含む非西欧諸国がおおむね共通して持っている自然と人間の捉え方の再発見でもある。ただしいまや、これを西欧文明をも説得できる形で提示する、理論的な考察

が必要な時となっている。

「お陰様」とは、「もろう」「いただく」ことであり、積極性・能动性・主体性とは異なる思想である。だが、消極性・受動性・従属性重視の思想というわけでもない。ここには例えば「させてもらう」ないし（自発としての）「させられる」が含まれることからも分かる通り、活動はなされつつ、しかしその主体を、自己を含む特定の二者に定位しない思想なのである。「お陰様」は、活動の焦点となる場、ないしは差し当たり注目を引く何者かを通して見た表現だが、その前提に、能動と受動、積極と消極、主と従などの対立とは異なる軸が、はじめから設定されている。

それが「お互い様」と表現される仕組みである。「互い」とは「違い」+「会い」を語源とし、異なる者の出会う様である。出会うの場、すなわち「あいだ」にこそ力と働きが生ずる。力の強い者を取りあえず祀るという構えも、この「お互い」の場をよりよく形成する努力の一環と理解できる。このような人間性のありのままから、すなわち「自ずからなるもの」としての自然から離れることの少ない仕掛けを内容に、道徳の徳目を立てる。これもやはり建て前である。しかしそのような建て前なら、理想を基準とした差別からくる過度の緊張は無く、本音と建て前の乖離や敵対が避けられる。明治以降は、唯一の正義と權威を主張する執拗な圧力が場の形成を歪ませてきたし、その教えは内容的にも「お互い様」を否定するものだった。

こうした状況での道徳教育の実践には、衰えてしまった基底部分の補強のため、言葉よりもむしろ体を用いた仕方での「お互い様」と「お陰様」の感覚を取り戻す必要がある。これが教育の形式の面である。理性主義の高い理想を教える場合ほどではないにせよ、教室での講義や文章によるだけでは、これらの感覚は身につかないだろう。そのような教え方自身が、教室での言葉や論理の特権性を主張しているので、「お互い様」に外れるからである。基底部分の本音の力が衰えているとき、建て前だけを教えたのでは、内容がどうあれ、やはりその場しのぎの言葉を並べよとの教育になる。学校教育の中にも、部分的に本音の形成を採り入れなければならぬ状況に、私たちはいるのである。

道徳教育における言葉の重要性を否定するのではない。論理的な考察や、また巧みに工夫された標語なども、道徳の指針として役立つのは間違いない。明治以後の徳目の多くが、西欧の概念の翻訳のために新しく作られた、または転用された漢語で表現されてきたことは、言葉の上滑りに拍車をかけている。「お陰様」や「お互い様」のような「やまとことば」で言われてこそ心に響く<sup>②</sup>。しかし、言葉の万能性は否定しなければならぬ。明晰な言葉に沿った理解さえあれば、道徳のすべてを導けるわけではない。それは「世俗的な欲望から離れた純粹な知性のいとなみ」こそ最高だという理性主義、精神主義から来る誤解である。

さて、体を使うと言っても、使い方がまた問題となる。例えば、

オリンピック種目に代表されるような「スポーツ」では、体は精神の支配を受け、外から設定された目標の達成に使役される。ラジオ体操は、体感を無視し、体を機械的に曲げ伸ばしする訓練である。これらでは、体は制御と支配の対象でしかない。これに対し、かつてわが国で発達した柔道、剣道、弓道などの「道」では、勝負は結果であって、それに伴う境地こそが問われた。書道も字を上手に書く技術ではなく、墨を磨ることから始まる一種の冥想であって、字はその境地の表現であった。修験道の登山は、高い山に登るのが目的ではなく、山で何に出会おうかが問題であった。明治初期までのわが国では、これらの「修業」は普通の人にとってもあたり前のことであり、成人式の儀礼としても用いられていたのである（オウム真理教が「修業しませんか」と若者を誘って教勢を伸ばしたのは、この忘れられた、しかし消えてはいない欲求に訴えたものであろう）。

こうした「道」の伝統が、学校教育の正課にほとんど入れられず、わずかにあったものもスポーツ化、技術化し、さらには排除される傾向なのは嘆くべきである。音楽や踊りも同様で、日本の民間のものを禁止したうえ、西洋和声法によるピアノ伴奏で、ヨーロッパ民謡・民舞が教えられてきた。まるで自国民を相手に、外国の植民地主義を代行しているようで、笑止の極みである<sup>3)</sup>。

道徳とは、それらしい徳目ばかりのものではない。それが「道」の徳であるなら、あらゆる活動のなかに埋め込まれていて、

人と自然のお互い様の関わりを導くものである。だから、明治以降の公教育がわが国の道徳を破壊してきた跡は、いわゆる道徳教材以外のところにも多く認められるが、それだけに、さまざまな方面から手を打ってゆけるとも言えるだろう。

### 結びに代えて

——まつりと酒・女・歌そして死

締め括りに臨み、もう少し具体的、かつ前向きに考えてみよう。例えば、本シンポジウムの行われた山形大学の近くには、山岳修業の北の中心地、出羽三山がある。このような素晴らしい環境は、生かすべきであろう。かつて明治期には政府によって修験道の禁止令が出され、戦後は一切の宗教と教育を切り離す建て前になっているが、広い意味での宗教を排除した形では、道徳の教育は不可能である<sup>4)</sup>。お隣の宮城県には松島がある。ここも多島海の風景の美しさだけでなく、修業場として名高い所であった。多くの行者が岩を穿つ、仏像を彫るなどの修業を続け、ここで命を終える者も多かった。修学旅行の地として、かつてはこのような宗教性が基準に採られていたが、最近では単なる観光旅行と化している。

敗戦後は、科学的ないし合理的客観性の思想が強調される傾向にあったが、これが行きすぎるといわゆる「科学」以外の思考法を認めない「科学主義」となる。とくに、「科学的な証拠がない」ことは存在しない、とするような合理性の過度の強調は、それ自

体が一つの「迷信」に他ならないのだが、科学史から見れば、世俗世界の合理性とその内部での禁欲・勤勉を説くプロテスタンティズムに繋がっている。科学的合理主義は、必ずしも宗教的に中立ではないのである。ただし、近代科学がユダヤ・キリスト教の影響下で成立したのは確かだが、可能性はそれのみに尽くされるわけではない。今後の発展においては、わが国の土着的なそれを含む別系統の宗教性が寄与できる見込みの大きいことは、付け加えておかなければならない。

さらに、出羽三山の信仰の特色の一つは、性・色事と、日本に土着する祀りの思想との、深い結びつきを示す点にある。これが湯殿山で、とくに顕わになっている。わが国の山の神は、一般に女である。湯殿山神社に社殿は無く、御神体は、たおやかな女神の体をなす、なだらかな山並みの谷あい<sup>5</sup>に在り、鉄分と硫黄と塩分を多く含む温泉の湯の花が固まってできた、赤い岩である。これが女神の秘所に当たることは一見して明らかで、それゆえ、そこで見たこと、したことを語ってはならないとされている。

語られぬ 湯殿にぬらす 袂かな 「芭蕉」

裸足になり、赤い岩に上って、湧き出る湯に口を付けて飲むのが参拝の作法とされている（「湯殿」なので、かつては裸になったのかもしれない）。粘り気さえ感ずる、匂いの強い濃い湯は、鉄分のため渋く、塩からく、女神の粘液とも月経血ともなっている。

山の神が女なのは、火山がときどき赤い液体を噴き出して爆発することに繋がるが、温泉はこれを優しい形で体験できる場なのである。この湯はまた、女神の乳でもあると感ぜられた（乳は血液から作られる）。芭蕉の句の「濡らす袂」には、この女神との秘め事が艶やかに込められている。

わが国の祭りが、このような色事絡みの事例に事欠かないのは、この他に、山形市にも分社のある諏訪の御柱祭を挙げるだけでも充分であろう。大和朝廷の正史である記紀神話さえ、男女の神の色事から国の産まれる様や、アメノウズメの裸踊りが世の暗闇を救う様を描いている。色事は、異なる者の出会う「お互い様」のひとつの極みである。わが国の土着思想は、そのように考えてきた。江戸時代まではそれがあたり前であったし、現在でも私たちはそれを、本音の奥では忘れていないと信じた（インドをはじめ、他の多くの文化にも見られる性格である）。

ところが最近になって、急に「セクハラ」なる犯罪がアメリカから輸入された。この背景には、色事や肉体を穢れた避けるべきものと位置づける価値観がはっきり認められる。さらに驚くべきことには、被害者の不快感の証言がこの犯罪を立証する根拠となり、色事への嫌悪と合わせると、かつての魔女裁判の仕組みの再現だと気づかされる。これは重大なことである。このような思想がわが国に定着するとは考えたくないが、いまや女子中学生さえ「セクハラ」だと言って、教師の指導を牽制する。若者のよく使

う「キモイ」という流行り言葉の中にも、この響きが感じられる。道徳とは、人を含む自然との付き合い、方と理解するかぎり、けつして取り澄ました理想的な徳目に留まるものではなく、身心ともに与る働きのあらゆる位相に見いだされるのである。つまり、楽しみ、喜び、怒り、酔い、そして狂うことさえ含まれる。それらをどのようにこなすかの修練に他ならないことが、忘れられてしまっている。

これらの例から知れるもう一つことは、道徳が、必ずしもその名前を冠した特定の授業でのみ教えられるのではないことである。座学の授業科目を置くことにも、なにがしかの意義は認められようが、そこで形成されるのは二層構造の上層がほとんどである。これに相即すべき下層の部分は、主に他の教科の実際の教育の中で、なにより教室の外で形成される。

ちなみにこの意味から、文部科学省が全国の小中学校の児童・生徒、総計千二百万人に配布した『心のノート』の、道徳教材としての有効性は疑問である。全国一律の奇麗事を並べ、道徳を個々人の心の中の反省とそれを表現する言葉に置き換えようとする試みは、これまでの誤りを強化することでしかない（道徳教育の中央集権化からむ問題がまた別に付け加わるけれども、ここでは論じるゆとりがない）。

またここから、教育をすべて学校のなかに囲い込むのは止めるべきだとも言える。近ごろ始まった体験学習などは、傾向として

は好ましい。地域社会や家庭の本来の教育力の復活を図ることも、当然に求められる。また、異年齢集団の形成による、子供、どうしの切磋琢磨、文化の伝承も重要である。

新しそうなことを輸入しては担ぎまわるのだけが良いのではない。そういう人たちが、この百年あまり「学識ある人」とされた。だが、私たちを育んできた、古くても大切な「有り難い」ものをどう守るのか、どう育み返すのか、考え直すときに来ている。そのようにしてのみ、乖離や敵対が少ない姿での、言い換えれば「和をもって尊しとなす」二層構造が維持できると考えられる。もちろん日本だけというのでなく、とくに非西欧文化圏での伝統文化の実践や、文字記録だけによるのではない日常的な祀り、慣わしなどを謙虚に学びつつ、そこから、それにふさわしい学問と教育の枠組みを、研究者・教育者自らが、身心ともに用いつつ磨き出してゆく姿勢こそ、いま必要と考えられる。

おかげさま おたがいさまで ありがたや

(1) 最近、イギリスのチャールズ皇太子が、「努力をすれば誰でも人のある職業につける」と教える教師を批判し、教育相と対立して話題となった。皇太子が、高い職業に就かない者は努力をしない価値の低い者だとのプロテスタント的人間観に対し、生徒への不当な圧力になると批判したものと解釈でき、興味深い事例である。

(2) もちろん、「やまとことば」でありさえすればよいのではない。

「きをつけ」「やすめ」も立派な「やまとことば」だが、胸が悪くなる。

(3) その延長線上に、軍歌や愛国歌があった。近年になってやっと言楽教育に和楽器の一部が取り入れられた。こんなことが一五〇年近くも続けられてきた事情が、研究に値するのは確かだろう。

(4) 小学校で給食時に行われていた合掌が、仏教の礼拝動作にあたるので特定宗教の強制になるとの、キリスト教徒の父母の批判により中止された事例がある。

(5) もちろんここでは汚かったり卑俗だからという理由で隠すのではない。

(6) 地域の祭りで、未成年の飲酒が問題とされる場合がある。未成年の禁酒が、法律で禁止するにふさわしいことなのかどうか、再考に値しよう。これは限定付きの「禁酒法」であって、やはり日本のキリスト教徒の主導で制定された法律である。正月に、屠蘇を子供に飲ませたところ、法律違反だと批判されて悩んだという人が、実際にいる(健康問題を言うなら、勉強で夜更かしするのはどうなのだろうか)。喫煙も同様で、法律により犯罪者が作り出されるので、中等教育の現場ではギスギスした追いかけっこが常に行われている。具体的に論ずるゆとりがないので、残念だが、問題の指摘に留めておく。

(じ) つかわ・みきろう、世界学、姫路獨協大学教授)